The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	蕪村・貴賤風雅論
Author(s)	藤田, 真一
Citation	語文. 1995, 62-63, p. 25-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68868
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

蕪村・貴賤風雅論

藤田真一

はじめに

芭蕉は、繁華の街衢を避けて、僻陋の巷に住まいを定め、「侘び」の生活にはいった。延宝八年（一六八〇）のことである。そして、「月をわび、身をわび、抽きをわびて」（『武蔵曲』）、「侘び」を極めようとする。また同時に、みずからを「乞食の翁」と呼ぶようになる（「乞食の翁」句文懐紙）。その意識は、晩年になってなお保たれ、自らの分身のごとき旅人を、「桑門の乞食順礼ごときの人」とも表現していた（『奥の細道』）。そもそも、その旅に出るにあたっての心構えとして、元禄二年春、猿雖宛と推定される手紙のなかで、

一鉢境界乞食の身こそたうとけれとうたひに侘し貴僧（増賀聖）の跡もなつかしく、猶ことしのたび（「奥の細道」の旅）はやつし〳〵てこもかぶるべき心がけにて御坐候。

と述べていた。これらは、芭蕉の貧しい生活実態そのものを表しているというよりも、その人の自己意識の一つの表現形式であり、「貧」の演技様式であったとさえいえるだろう。

また、右の手紙に続けて、「道の風雅の乞食」という語句が見えるように、あるいは、元禄三年の歳旦吟「薦を着て誰人います花の春」の句に、西行『撰集抄』の逸話中の人物を託すように、芭蕉にとって、「乞食」の境界と「道の風雅」とはつながり合うものであった。そして、「素翁（素堂）りはく（李白）にかはりて、我貧をきよくせむとす」（「四山の瓢」）というのは、「貧」に居ることが、「雅」に通じていてほしいと願うことばであったろう。『奥の細道』の「清風」を、「かれは富るものなれども、志いやしからず」と称揚するのは、その逆からいった表現である。誠の志を実現しようとする芭蕉にとって、「乞食」の境界におろうと意思すること、「貧」であろうとすることは、必然であった。

蕪村は、「貧居八詠」と題する連作を試みたことがある。尾形仂氏の推定によると、安永三年（一七七四）冬の作である。とすると、同年秋に作られた、愛弟子大魯の「秋興八句」に触発されて、創作を試みたかと推測されるものである。

従来、この連作は、蕪村の「貧居老残の自画像」が表されているという見解があった（筑摩書房『古典日本文学全集』三二、栗山理一稿）。しかし、より大切なことは、「貧居」というのが本来詩題であるということである。『円機活法』詩学編第六巻に、「貧居」の項がある。ここに挙げられている諸々の詩句のなかに、たとえば、「老硯棲レ氷筆損レ尖」（シテ ジ）というのがある。これは、あたかも、「貧居八詠」の末句、「筆豁（あらは）に筆の氷を嚙夜哉」の発想に通じているよう

にみえる。あるいは、「飢鼠上二琴書一」や「鼠窺二余粒一上二陶瓶一」は、第五句「氷る灯の油うかゞふ鼠かな」に関連するようにみえる。また、「貧居」の項の冒頭に、顔回瓢簞の故事を出して、『論語』の「賢哉、回也」の語句を挙げているのと、「高樹有レ巣鳩笑レ拙」の例句とを併せると、第二句目の「かんこ鳥は賢にして賤し寒苦鳥」につながっていくように思われる。

蕪村が、『円機活法』を直接ふまえて句作したかどうかは、わからない。要は、この連作の底に、詩題としての「貧居」があり、詩・俳において、発想の基盤の共通性が認められるということである。そして、その創作動機として、弟子の作品からの刺激があっただろうということである。いずれの契機も、内的ではなく、外的なものである。「貧居老残の自画像」という評価を否定するものではないし、外因的動機に内省を潜めていても不思議ではないが、蕪村の句作方法の形という側面をもっと重視すべきであろう。すなわち、一方に「貧居」の詩題があり、他方に八句連作という、杜甫以来の趣向の形があって、そこに俳諧としての「貧の生活ぶり」を表現しようとしたものということになる。

本稿は、蕪村の「貧」の表現様式を、作品に即して考え、「貴・賤」の相対する概念をこえて、蕪村がいかなる風雅をめざしたかということを考察するものである。

一　小家

離落

うぐひすのあちこちとするや小家がち　（蕪村句集）

『蕪村全集』発句編に明和六年作と推定。『俳諧新選』『続明烏』の二撰集に重ねて入集するほか、句稿類にも載録し、自信作であったと思われる。句形に異同はない。ただし、「離落」は「籬落」の誤記で、竹で編んだ簡素な垣根のこと。この詞書は、他に『続明烏』に見える。句意は明解、小家の建ち続く垣根づたいに、鶯があちらで鳴いたかと思うと、またこちらで鳴く、といった早春の景を詠んだものである。

この一とおりの解に対して、田中道雄氏は、「趣向の料としての実情」（『江戸時代文学誌』第八号）のなかで、『源氏物語』夕顔の巻の一節、「げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、このもかのもあやしくうちよろぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどにはひまつはれたるを、口惜しの花の契りや、一房折りてまゐれ、とのたまへば」（傍線・傍点は田中氏）を引用し、傍線部が蕪村の語彙に対応するとする。さらに、右引用文の直前に見える、「かうあやしき垣根になん咲きはべりけりる」が、詞書「籬落」を引き出したとする。その上で、田中氏の提唱する「二段階鑑賞法」にのっとって、第一段階に、「春光注ぐのどかな下町風景」と解し、第二段階として、「夕顔巻のさびれた五条通りに相似る下町にも、今同じく春が来た、かの源氏訪問の夏に比し、季回って貧家の陋屋も陽気に充る、と情を加えて」解釈する。

たしかに、「小家」は、文字どおり家のサイズの小ささをいうとともに、粗末・貧相の義を属性としてもつことばである。同じ『源氏物語』常夏の巻に、「かかりける種ながら、あやしきこいへに生ひいでけること」（傍点藤田）とあるのも、小家の卑賤ぶりを言っている。ことに先の「夕顔」の文章は、京五条界隈の猥雑性をよくかもしだしているといえよう。そして、この語義は、以後近世に至

っても大きな変化は認められない。

さらに、歌語「このもかのも」を、「あちこち」と俳言化したと考えるならば、一句はたしかに俳諧性に富む句作りとなる。

しかし、「小家がち」と「あちこちとする」から、ただちに源氏を想起することはかなり困難であり、また、源氏の場面から鶯の鳴く風景までは、ずいぶん距離があるといわざるをえない。というより、逆に「鶯」から源氏に至るには、大きな跳躍を必要とするだろう。そこで、田中解を尊重しつつ、別回路から迫ってみたい。

そのために、制作現場から発想の過程を推測してみよう。本句の「鶯」の季題は、明和六年一月二十七日、田福亭での兼題であったとされる（尾形仂『蕪村自筆句帳』）。とすると、蕪村は、「鶯」の題を目の前にして句案したはずである。題と句の間の桟となる、なにがしかの媒介があってしかるべきであろう。

そこで、『増補和歌題林抄』（宝永三年刊）の「鶯」の項をみると、以下のようになっている。

たによりいでゝはるをしらせ、ふるすをすてゝ花にうつるともいひ、まがきの竹にねぐらさだむるともよみ、はながさにぬふとも。しづがかきねにこづたひて、里なれそむるとも。

早春谷から出てきた鶯が、「しづがかきねにこづたひて」、里に馴れ親しんでいく、というのが、「鶯」の本意であると説いている。

このような鶯の本意をふまえて、蕪村は、小家がちなる界隈に飛び来った鶯が鳴く音をあげるのは、「しづかかきねにこづたひて」であることを、「籬落」の詞書で示そうとしたのではないか。

人は、鶯の春を告げて鳴くのを心待ちしている。その待つ心情において貴賤の区別はないはずである。たとえ陋屋に住まいしようが、春待つ心には切なるものがある。「鶯の鳴かぬかぎりは（春は）あらじとぞ思ふ」（古今集・春）のであるから、小家の人びとに春を告げるためには、鶯は家ごとに鳴く音を伝えなければならない。それが、鶯の「あちこちとする」理由である。当然、そこに作者腐心の俳意があるといえる。鶯の鳴く音が聞こえる人里ののどかな風景にまずは印象づけられるとともに、よくよく注意すると、かならずしものんびりとはしない、むしろせわしない鳴き方なのであるが、それも賤しき小家がちの界隈ならではと了解されるのである。

ところで、蕪村には、この他にも「小家」「小家がち」の語を用いた作例が多い。そのなかには、「羽蟻とぶや富士の裾野ゝ小家より」のように、明らかに大・小の対比効果としてこの語が詠まれた句もある。しかしまた、「小家」の陋屋性を活用して作られた句もある。たとえば、「水鳥や朝めし早き小家がち」は、群れなす鳥たちの早朝の食餌に、人様の朝食を重ね合わせたところに俳諧的滑稽が潜んでいると思うが、この句が、そんなにして生業に励む人の営みをかいま見せるのは、「小家がち」の語の働きによるところが大きい。また、「さくらより桃にしたしき小家哉」は、「桃」に「賤屋」が付合とされる（『類船集』）ような連想から発想された句であろう。「桃」と「小家」の連想は、「沙魚（はぜ）を煮る小家や桃のむかし貝」にも生かされており、あたかも、かつて小家に、さもふさわしく咲き匂っていた桃をなつかしげに回顧する気味がある。

あるいは、「菜の花や油乏しき小家がち」は、広々とした菜の花畑を背景に、肩を寄せ合うように建ち並ぶ小家からは、灯火をともす油が不足するのか、細々とした明かりしかもれてこない、わびしげな光景を詠んだものである。一面の菜の花の豊かさと対照的に、

菜種油を採取して生活を営む家々の貧寒さが強く心をうつ句である。

その反対に、「雪国や粮たのもしき小家がち」には、「雪国」であることに加えて、小家の続く頼りなげなさまとはうらはらに、ゆったりと食糧が蓄えられているという心強さが詠まれている。

以上を概観すると、「小家」の語が含む、語義の多様性を最大限に駆使しながら、句作りされていることがわかるだろう。そして、その句作りには、いつも何がしかのヒネリが加えられて、俳諧的風雅性を確保しようとしているといってよいだろう。

二　貧　賤

月天心貧しき町を通りけり　（蕪村句集）

初案は、上五が「名月や」（『落日庵句集』）であるが、晩年に自らまとめた「自筆句帳」でこの句形に定めている。諸注、「月天心」としたところに、本句の命があると見ている。この語句は、『古文真宝』前集所収の、邵康節作「清夜吟」にもとづいている。

月到天心処　　月　天心に到る処
風来水面時　　風　水面に来る時
一般清意味　　一般の清意の味はひ
料得少人知　　料り得たり　人の知ること少なるを

当然、「月天心」だけに目を向けるのではなく、詩意全体を汲んだ解が要求されるだろう。たとえば、「昼間は薄汚れた町並みも、夜更けには天心に懸かる月の光であまねく浄化されて清々しささえ感じさせるというのである。世人の知ることの希な、そのような『貧しき町』の変化に遭遇した感動を詠んだもの」（『日本名句集成』損斐高稿）と解するごとくにである。

さらに、初案形の「名月や」ではなく、「月天心」でなければならないことが強調される。たしかに、天の中央に輝く月光の美しさをいうだけでなく、人みな寝静まった深更であることも、「月天心」の一語で言い表すことができたのである。

しかし、翻って、初案で「名月や」と置いた作者の心情も無視してはならないだろう。「名月」に「貧しき町」は落差の際立った取り合わせである。「名月」なら、中秋の月、「歌人騒客の晴を期する」（『日本歳時記』）ものであり、ことさらに今宵の月を愛でるのである。そのせっかくの名月も、「歌人騒客」などとは無縁の「貧しき町」ではみな寝静まって愛でる人などありえない。薄汚れているから、町が貧しいのではない。この美しい月などに目もくれない町が、貧しいのである。慈しむ人がいなければ、月は美しくない。むなしいばかりである。そこに逆説的な美を見いだしたのが、本句の初案形である。初案は、名月と貧しい町との対比の句である。

それを、漢詩「清夜吟」の世界に導き入れることにより、町は月光をあびて一気に清らかなものとなる。さらに、町のだれひとりとして知るもののない、この絶妙の光景を、我ひとり堪能することができたというのである。だれも知らないからこそ、それをただひとり我が物とする喜びがある。「中〳〵にひとりあればぞ月を友」という句のある蕪村ならではの、ひとり月見の句であった。それにしても、「貧」の中に「月」を見る美意識は、蕪村独特である。

針折て梅にまづしき女哉　（書簡）

縫い物にいそしむ女が、針が折れてふと目を上げると、視線のかなたに梅の花が美しく咲いていた、というのである。貧しさのため、およそ風雅なるものとは無縁な暮らしをしている女が、梅の花に目

を留めて、雅なるひとときを持つ。梅＝雅と貧＝俗とをつないで、一つの世界に同居させたのは、「針折て」の働きである。

若楓貧しき賤がはき掃除　（落日庵句集）

身分低き者（下男など）が、奉公先か寺などの庭を懸命にはき掃除している傍らの楓の木は、鮮やかな若葉が美しい。その男にそれが目に入っているかどうかも怪しい。ここでも、美なるものと貧なるものとが対比されている。あるいは、貧が若楓の美しさを裏から支える関係になっているといってよいだろうか。注意すべきは、「貧」と「賤」とが結ばれていることである。貧しさと賤しさとは、似かよった概念をもっている。「貧」のすぐ隣に、「賤」がある。

貧僧の仏をきざむ夜寒かな　（蕪村遺稿）

ひとりの貧乏僧が、秋の夜の寒さも厭わず、一心不乱に仏を彫っている。仏には尊さや気高さが刻まれることであろう。僧侶としての身分も名誉も望まなかったようなこの僧の、まさに貧なるがゆえの尊さがここにはある。この句では、僧の「貧」であることが、仏を刻む行為に、「貴」の保証を与えている。

雨の時貧しき蓑の雪に富り　（蕪村遺稿）

雨にしとど濡れた蓑はいかにもみじめたらしい。そのような蓑が雪に覆われると、一転して富貴へと様変わりする、というのである。『蕪村全集』の解は、『蒙求』の「王恭鶴氅」を典拠として、雪が鶴の毛衣となって美しく富貴であるとする。雪が蓑を貧から富へと、価値の逆転がおこなわれたのである。

蓑はむろん雨具である。雨が降れば身につけるものである。しかし、本然の利用がなされて、それがなぜ「貧しき」と表現されなければならないのか。それは「貧」の語が、「賤」の語と隣り合わせのものとして意識されるからではないか。『俳諧小傘』のなかで、「蓑」は、付合語として、「船頭・墓守・鵜飼・菰刈・山人・百姓・順礼・人歩・落人」などが用意されている。これらはすべて「貴」にではなく、「賤」に属する語である。蓑は、賤なる者たちの着するものなのである。そんな蓑を、「貧」から「富」へ、そして「賤」から「貴」へと引き上げる役割を果たしたのだが、「雪」であった。「蓑」が貧に属している間は、陳腐なる散文的世界にとどまる。それを、「富」に転換したところが俳諧であり、詩である。

以上見てきた、「貧」を詠んだ句は、いずれも、何がしかの操作を加えることによって、貧賤に属するものが風雅の世界に転じられていた。その操作をおこなわせたのが、俳諧である。卑俗を高雅へ昇華させる方法が、俳諧の方法である。

三　よき人

よき人を宿す小家や朧月　（蕪村句集）

『蕪村全集』の解は、「朧月の艶美な夜、思いも寄らず高貴なお方をお泊めした貧しい小家。まるで夢のような心地である」として、そのうえで、さらに、『源氏物語』夕顔の巻などの俤に似る、と解説する。「よき人」は、とりあえずは、高貴な人の意としておく。そして、また「小家」の陋屋である。となれば、「よき人」と「小家」は、本来別世界のものであろう。「小家」になど「よき人」が足を踏み入れるはずはない。それを宿したというのは、よほどの事情が隠されていることになる。そこに、艶なる秘め事を感じるのは当然であろう。「よき人」と「小家」のことばのアンバランスが、恋めいた秘め事の匂いをただよわせるのである。田舎に遊びにきた

都の人一般を「よき人」と言って、たまたま一軒の小家に泊ったのだとする、木村架空の説（『蕪村夢物語』）に従うことはできない。その説では、「よき人」と「小家」は平面的になり、語義の位相差は生じない。落差のないところに、意味の広がりを期することはできない。もちろん、恋のニュアンスも生まれない。それでは「蕪村」にならない。

辻駕によき人のせつころもがへ　（蕪村句集）

街角で不特定の人間をのせるような辻駕に、「よき人」が乗るなどということは通常では考えられない。戸も覆いもなくて、顔をあらわにする辻駕に、ひとかどの御方がお乗りになっているとは想像を絶した光景である。それを可能にしたのは、「更衣」である。初夏の軽装が、「よき人」の身も心も軽々しくさせ、ついちょっと町駕に乗る気持ちにさせたのである。「更衣」は、もとは宮中の行事であったものが、次第に民間に広まったものといわれる。そこで、貴人も庶民も気分を等しなみにさせるとされたのであろう（後述）。

能き人や醴（あまざけ）三たび替にけり　（落日庵句集）

「能き人」が甘酒を三度お替わりをした、というだけの句である。甘酒は、「一宿ニシテ熟スル」（『和漢三才図会』）ところから、「一夜酒」とも呼ばれ、また、古来六月朔日から七月末日まで天子に献ずることになっていた。したがって、甘酒を口にすること自体が、「能き人」にふさわしくない、というのではない。『蕪村全集』の解のごとく、「身分高き人が庶民的な甘酒を賞味する」（傍点藤田）ことに注目し過ぎないほうがよいと思う。むしろ、三度のお替わりを所望したところに着目すべきではないか。

たとえば、同じ蕪村に、「三椀の雑煮かゆるや長者ぶり」という句がある。これも、「ちょっとした長者を気取って雑煮を三杯もお代わり」して、「貧しいながら満ち足りた思い」（『蕪村全集』）を詠んだのではなく、三椀のお替わりをするところが、いかにも長者風で、年始にふさわしい豊かさを感じせしめる、とするべきではないだろうか。

「醴」の句も、身分高き人が甘酒などというものを三度もお替わりをなさったことに驚いているのではないだろう。甘酒をたっぷり召し上がったところに、「能き人」の本性をみて、賛嘆したのである。なるほど「能き人」ならではのお振舞いだ、というのである。「や」の切れ字がそのような解を要請している。

蕪村の愛弟子几董も、しばしば「よき人」の句を作った。浅見美智子氏の『几董俳句全集』によると、

よき人にそと沙汰し見るや河豚汁（ふくと）
よき人の踊習ふや盆の果
よき人の傘にとまりてせみの声
よき人の菊見に来ます小家哉

その他の作が見える。それぞれに、蕪村の作例に共通する発想が認められるだろう。とくに、右の最後の句は、「よき人」と「小家」の大きな落差を、「菊見」という雅びなる行為によって埋めようとする句作りである。蕪村の句法を襲ったものということができるだろう。

ところで、この「よき人」の語は、『徒然草』に顕著に見られる語のようである。西川清治氏の「つれづれ草『よき人』の論」（『法政大学教養部紀要』第十二号）によると、全部で九箇所（九段）に見え、それは「この作品ではたしかに異例的な頻度で」ある、とさ

れる。そして、「このことは兼好の心の中に『よき人』の像がかなり大きな典型として定着していたことの証左となしうるであろう」と概括的に述べている。

以下、西川論文は、「よき人」の使われ方のそれぞれについて、逐次に意味を考察している。個別の意味のずれを押さえたうえで、全体としては、「身分もよく教養ある人」というとらえ方ができるとする。それに「肉づけ」をすると、「安んじてしみじみと話のできる人」、「親しさのうちにも節度・作法を知る人」、「生活の様式に高尚な好みを持つ人」、「ものの情趣の真の享受のしかたを知る人」、「古典や故実にも明るいはずの人」ということになる。さらに、それは、「いわゆる都の紳士」であり、「誇り高き生活の規範となりうるような人物」と評されている。これを要するに、最高の理想的な人物を、総体としての「よき人」といってさしつかえないだろう。

「よき人」の、「よし」という語の指し示す意味内容は、かならずしも具体的ではないし、限定的ともいえない。むしろ、漠然とさえしている。それは、『徒然草』の「よき人」の統一的概念が曖昧であることに由来するものである。しかし、かえって、その曖昧さのなかに、身分・教養・美的感受性・人柄といった、いわば人間の総体的理想像が内包されているということができるだろう。

そこで、蕪村にたち戻る。蕪村や几董が「よき人」の語を多用する背景に、『徒然草』があったと推測することは容易である。蕪村が、日本の古典のなかでも、とりわけ『徒然草』に親炙していたことはよく知られている。谷地快一氏の「蕪村における『徒然草』の受容」（『俳文芸』二十二号、のち江戸人物読本『与謝蕪村』に転載）の論文や、多くの注釈書類において、蕪村作品が『徒然草』を援用することの多いことが指摘されている。『徒然草』が蕪村の座右の書であったことは確実である。

安永二年刊の『此ほとり』第四歌仙中に、

新聖霊の給仕する也　　董
能住居秋の暑さのゆかしくて　　村

という、几董・蕪村の付合いがある。この「能住居」というのが、『徒然草』第五十五段の住居論によっていることは明らかである。「家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬はいかなる所にもすまる。あつき比わろき住居はたへがたき事也」という文章の、「わろき住居」の反対語として、「能住居」を提示したのである。残暑厳しき折、「夏をむねと」した「能住居」が慕われるのである。『徒然草』にいう理想的住居を、蕪村は「能住居」と一言でいい取ったのである。この物言いは、「よき人」と通じ合うところがあるだろう。

近世和歌においては、たとえば、橘千蔭の『うけらが花』に、

よき人のこゝろたかさにたぐへ見む梢の花も月のひかりも

という例がある。この「よき人」は、詞書によると、妙法院真仁法親王をさすようであるが、身分の高貴さや志操の高さの点において、申し分なき人物をいっているのである。

次は、上田秋成の『藤簍冊子』一に見える歌である。

貴公子

よき人のながき心は初春のうら〳〵照す日影なりけり

ここにいう、「よき人」は、「貴公子」という題によって明らかなように、限定的で、狭い意味で用いられている。のどかな心というのが、この貴人に付与されている。蕪村がこれと同様の意味を出そうとするときは、「あて人の岡に立聞きぬたかな」と、明確に「貴

人」にあたる語を用いている。「よき人」に重なる語義をもっているものである。

この語に対する蕪村の理解と、同時代の和歌のなかでの使用例との間に、大きな懸隔は認められない。だが、「よき人」をただ称揚して歌い揚げる和歌のとらえ方が、俳諧にすぐつながるわけではない。

蕪村の「よき人」の句の場合も、総体としての理想的人物を思い描いて句作りされている。しかし、理想的人物像を申し述べたところで、それが即俳諧中の人物とはならない。「小家」に宿り、「辻駕」に乗り、あるいは「醴」を三度も飲み干すという、具体的な行為をおこなって、ようやく俳諧中の一人物となりおおせたのである。別の表現をとるならば、雅の世界に属するものが、ある文学的操作を経て、卑俗のレヴェルにまで舞い降りてくるということである。ただし、それが俗の世界にたんに堕しただけのことであれば、詩となることはできない。「よき人」が規範性を失うことなく、しかも俗の世界で生き生きとしていなければならない。それは、雅と俗の、ある種の合一が果されることを意味する。そうした文芸化の過程を俳諧的営為ということができるだろう。

しかも、そこには、蕪村ならではの俳諧的営為があったはずである。

四　貴賤風雅

腹あしき隣同士のかやりかな
いとまなき身にくれかゝるかやり哉
蚊遣火や柴門多く相似たり
学びする机の上のかやり哉

いずれも蕪村の「蚊遣り」の発句である。第一句は、短気で、怒りっぽい、陋巷の隣同士の住人が、蚊遣りの煙にいさかいをおこしているところ詠んだ句である。二句目は、あわただしい生業に一日を送った者の身に、夕暮れ時ともなると容赦なく蚊遣りの煙がおそいかかる、というもの。また第三句は、屋内から蚊遣りの煙が立ち昇ってくる、その界隈の簡略粗末な門のならぶ風景は、いずれも似たりよったりである、というものである。最後の句は、学問にいそしむ者のために、せっかく用意された蚊遣火だったのだが、本人はその煙ったさに閉口して勉強どころではなくなって退散、あとには机の上に取り残された蚊遣りがむなしく煙をあげるばかりである、という意味である。

「蚊遣り（火）」は歌語である。この題を歌に詠じるときの心得が、『初学和歌式』（元禄九年初版刊）には次のように説かれる。

かやり火は、いぶせくいとはしきやうによむが相応也。賞翫する心はよまず。されど、よ所（そ）よりかやりのけぶりのたつをみて、おもしろきやうにはよめり。或は、かやりの煙に月影のくもるをいとひ、軒ばにくもるかやり火のたちさらぬ煙をいとひ、くれかゝる遠里にけぶりのたつ景気をいひ、下くゆるけぶりをうきみの思ひによそへ、一村雨の名ごりに煙のしめる心をいへり。すべていやしき家にするわざなり。仍しづがかやりなど読り。

蕪村の「蚊遣り」の句は、あたかも右の解説を下敷きにして詠まれたかの感を抱かせる。歌語としての「蚊遣り」の本意の、いわば俳諧応用編といった趣すら呈している。なかでも、先の蕪村の一～三句目などは、「隣家蚊遣火」「晩蚊遣火」「里蚊遣火」といった歌題（いずれも『明題部類抄』中の歌題）を、俳諧で詠んだかのようにも見える。

蚊遣火は、和歌では、貧かつ賤に属するものであり、そのイメージにたった本意性をもっていた。そして、蕪村もその基本をふまえて、貧賤の枠のうちで句作りをしていた。貧賤・富貴の境界を踏み越え、二つの位相をからませようとは、とくにしなかったように見える。それは、一節から三節までに見てきた作例とはいささか異なる態度だといえるだろう。

そもそも、和歌において、「遣賤」の区別はいかにとらえられ、どう意識されていたのであるか。もちろん、和歌はあくまでも「貴」の側にあるものであったから、本質的に「貴」の美意識にかなうものしか詠まないのである。しかし、「蚊遣火」のように、「賤」に属するものを詠まないでもなかった。ただし、それは、「いとはしき」ものとして詠むのであり、おもしろいと見る場合でも、「よ所より」眺めやる立場にしかいないのである。「蚊遣火」のなかに身を置いて、生活をともにする立場は、けっしてとらない。賤しきものを、傍観者として眺めているのである。その意味で、「貴賤」の区別は截然と意識されていたはずである。

本居宣長の『紫文要領』下巻に、次のような「貴賤論」が見える。

貴人は貴人の情、賤者は賤者の情、僧は僧の情、俗は俗の情、男は男の情、女は女の情、老人は老人の情、壮夫は壮夫の情、とすこしづゝかはる所の有物也。さればこの物語（源氏物語）の中にも、それ〴〵かはれるやうをかきわけたり。情のみならず、言語もすこしづゝかはれば、それもそれ〴〵にかきわけたり、見る人よくよく心をつけて味ふべし。されば、貴人の情と賤者の情とかはれる所有事勿論也。

この文章は、和歌を詠むにあたっての心得として、なぜ貴賤の差別を設けなければならないかを、問答形式で説いたものである。ただし、別の箇所では、「人情は和漢・古今・貴賤の差別なきは勿論」であるともいっているのだが、同時に、やはりそれぞれ「すこしづゝかはる所のある物」と述べて、全体として貴賤の違いのあるところに主意があるといってよいだろう。そして、貴人の情を学んでこそ、よい歌が詠めるのであるとする。それは、「古への歌はみな中以上のよめる物にして、平民のすめるはな」いのだからだとする。ここにいう「平民」とは、「賤民といふは庶人なり」（『渓雲問答』）というのと同意と考えられ、ヒトを貴と賤に分けて、和歌は本来「貴」の側に属するものであるという思想が抜きがたいものであったことを示している。宣長の歌学は、二条家流を基礎としており、右の議論もその線に沿ってなされていると思われる。

次に、和歌における貴賤の区別を、具体的な事例にとって見てみる。松井幸隆の『渓雲問答』に、「白重、賤が身におはぬよし。よめる人ありしに、賤の衣も昔は白かるべく候。白がさねしてけふのよそほひは品もわかれず、といふ歌あり。しかれば、上下ともに卯月一日は白がさねとみえたり」という記事がある。これは、更衣の装いを詠むに際しての注意を説いたものである。同書にはまた、「いやしきもよきもひとへに麻衣、と更衣によみし人ありしに、麻衣は賤者の衣に候。貴者は服の時着用候。更衣に、麻衣着用の事はなく候」と説かれる箇所もある。四月一日の更衣に着る衣装について、貴賤の間に明確な区別があり、混同して歌を詠んではいけないのである。

しかし、こういう場合もある。『増補和歌題林抄』に、「貴賤更衣」という和歌題が挙げられており、その例歌として、寂蓮の、

人なみにしづがたもとのかはるこそはなのころもは名さへおしけれ

が掲出されている。更衣の時節には、賤しき者も「人なみに」花の衣に装いを改めるものだ、と詠んでいるのである。「人なみ」とは、貴人なみのこと、更衣の今日が貴賤等しなみであるのは特別のことであり、裏返していうと、通常賤しき者は「人」の数に入らぬのが歌詠みの常識であったのである。

蕪村や宣長と同時代の人であった、小沢蘆庵も同じ題のもと、次のような歌を詠んでいる（稿本『六帖詠藻』）。

宮人の袖つき衣山がつのうづら衣もけふはかふめり

この歌でも、「宮人」（貴）と「山がつ」（賤）とは本来は別々の存在のものであることが前提となって詠まれている。次の二首の歌でも同様である。

貴賤夏祓

みのうさやへだても波のゆふは川高きいやしきはらへすらしもいやしきもよきもうきせのかはらねばみのほど〳〵のはらへをぞする

蘆庵は、歌論『布留の中道』において、人の世にあっては、「都鄙・高卑・貧富・男女・老少の情」に通じ、あるいは人々の生活ぶりの諸相ことごとくを知り、さらに自分の心をそれらのものに寄り添わせ、その情に達することがなければ、歌は「虚妄のたは言」に終わると主張している。この主張は、「高卑・貧富」などの差をなくすのではなく、あることを前提として、その差を思いやることの大事を説いているのである。したがって、「へだてもなし」とか「いやしきもよきも」かわらないと詠む右の歌についても、「みのほど〳〵」を守って、伝統的な詠法を逸脱しているのではないというべきであろう。近世和学に新境地を切り拓いた宣長にしても、近世歌壇に新風を送り込んだといわれる蘆庵にしても、和歌はあくまでも「貴」の世界に属するものであり、「賤」を詠む場合もその世界から思いやる立場を守った。それが、和歌の立脚点であったのである。

このことは、蕪村の「蚊遣火」の句も似た態度であった。すなわち、和歌的本意に足場を置いての句作りであった、ということである。それは、この題が和歌題であったことが、その発想にも影を落としていたと考えることができるだろう。

いさかう隣人たち、日々の生業に齷齪する人びと、また貧素な住まいの住人にとって、蚊遣の煙のいとわしさもその身に応分であるといえるだろう。「蚊遣火」とそれらの人びとは、同じ貧賤の世界に属し、蕪村はひたすら「賤」の平面の内部で句を案じていた。

ここで改めて、蕪村の、貴賤のわいだめを昇華した俳諧のありようを糺す必要があるだろう。貧賤に属するものをその世界に据え置いたままならば、俳諧はついに卑俗のままであり、また逆に、富貴のものが雅の世界にとどまるならば、俳諧はその意義を喪失する。貧賤と富貴がぶつかりあい、止揚して、新たな雅の世界を築こうとするところに、俳諧の意義があった。そして、貴・賤を昇華させた意味の広がりのところに、蕪村俳諧の豊かさを味わうことができるのである。

（一九九四・八・十一）

〔付記〕論文作成にあたって、ご高配をたまわった浜田弘美氏に深謝申し上げます。

――京都府立大学女子短期大学部教授――